二葉亭四迷原稿

平凡

五

へ14
4401
5

大正十年十一月十一日寄贈
澁川柳二郎氏

へ14
4401
5
特

東京朝日新聞原稿用紙

平凡（三十九）

二葉亭

松が来て私はうんざりしてうつさが、雪に江さんは及て気向ひの時よりぱぐみ出して、果は松の方へ膝を尚けてうつて、松ばかり

を相手に話をする。私は喪るか喪ないか分らんやうにがらつた。初は少からずふ
辛に思つたが、志かし雪江さんを紛てみる
のには、及て此方が都合がないと、で、母屋
な貸切つて、庇で満足して、雪江さんの白い

ふつ
くりしと面を色かず眺めて、二人の話を
聴いてゐると、松し強く侵吾ふが、雪江さ
んも中々負けてゐない。話は云らん事ばか
りで、今度開化しと小間物屋は安賣だけれ
どもが寒いの、お湯屋のお神さんのお腹が

もと大きくざらつてゐる来月が臨月だの、八百屋の猫が児を生むので二疋喰べてゐつたさうだの。と、安すらに爲にも附かん話ばかりだが、主かし宮江さんの話をする孫子が好い。物を言ふ時には絶えず首を揺かす、其度に

リボンが飄々と一緒に揺く。時々は手真似しすると。今朝行つと来髪がもう大分乱れて、後毛が頬を撫でるのを蠅さうに捲上げる。手附かない。其れも時には、從は友禅メリンスといふものだか、縮緬だか、私には

分らないが、何でも赤い模様や黄ろい羽が雑然とついと華美な襦袢の袖口から、少し紅味を帯びた、白い、滑こさうな、柔かさうな腕が、時とすると二の腕まで露はれて、少し持上げたら脇の下が見えさうだと、

氣を揉むでゐる中に、又昭の置に戻つて了ふ。雪江さんは毒々しけれど、乳の高がふつくりと持上つてゐる。大方乳首さんは淳赤くなつてゐるばかりで、ゐるか無いか分らまいこだらぞと思ひながら、雪江さんの

向むかり見てゐると、しかし私は現實を
離れて、[illegible]が恍惚として[illegible]つて、
雪江さんが行ぢか私のこの妻でもない、情人
でもないこの行ぢら動ら高[illegible]に居られて
に自分の物、今は動らうとはいふ他人

を交ぜて話をしてゐるけれど、今に時刻が
来れば、二人一緒に動ら奥まらと座敷へ行
くと、もう其處に床が敷つてある。寢具
も[illegible]内か何かどの私が着物を脱ぐと、雪江
さんが後からフワりと寢衣を着せて呉れる。

えげん
今晩は寒いわねえとか雪江さんがいふ。む
む、寒いなあとか私し言つて、急いで帯を
クルしと巻いて、床へ階りひた。雪江さ
んが私の脱棄を畳むでゐる。其様な事は好
加減にして早く来て寝なと私がいふ。ちい
と雪江さんが私の面を見て微笑する。

「ねえ、古屋さん、然うもわねえ？」
と雪江さんが此方を向いたので、私は吃
驚して眼の覚めとやうな心持にでうた。何
でし何か私の同意をもとめてゐるのに違ひな
いから、何だか仔細は分らないけれど、

「さうですとも」

と後を合はせる。

「そら、御覽な。」

と雪さんはみその方を向いて、み話に夢中にさせる。

東京朝日新聞原稿用紙

私はホツと溜息をする。今の續きを其儘にしてゐるのは惜しい。もう一度、幻燈で

も何でも構はんから、もう一度今の

考へて

見ようと思ふけれど、

気が散つて

もう其心持にされない。仕方がないから、

黙つて話を聴いてゐる中に、又うしか悦

捻と脇が脱けるやうにがうて、雪江さんの

面が右を向けば、私の面も右を向く。雪江

さんの面が左を向けば、私の面も左を向く。

上を向けば、上を向く、下を向けば、下を

向く。

平凡（四十）

二葉亭

パッと話が[illegible]休む。雪江さんも黙つて

て了ふ。私も黙つて了ふの行先で[illegible]か遠方で

犬の啼聲が聞える。

前田天使が通つたのだ。

雪江さんは欠びをしながら、手を伸もして、

「もう何時ごろうの。」

「まだ早いです、まだ三」

私が寝狂てン早い事にしてゐる心を無理に

私は寄しないで、

東京朝日新聞原稿用紙

「もう九時過ぎとでせうよ。」

「阿父さんも阿母さんも遅いのねえ。何

欠びをしてゐるンごらうてこと」と言ひながら

して、「あゝく、古屋さんの勉強の邪魔

しッちやッしと。私もう奥へ行くわ。」

私が些とも祝賀なぱふいといつて止めしけれど、彩う彩うとしては留らない、雪江さんは出て行つてしまふ。松も出て行く。私一人になつてしつと。つまらない。

ふと雪江さんの座敷園が暖に入る。之を見ると、何ぞか探して探し物が看はつさやうな氣がして、辛抱して引き流つて、急いで部上つて雪江さんの跡を追つた。

東京朝日新聞原稿用紙

家の門のえの暗い處で雪江さんに追ひ

た。

「なあに？」

と雪江さんのびっくりしたやうな顔がして、

大方振向いたのだらう、向の廊下だけが微かに白く暗中に見えた。

「ちがう、貴嬢の座布団を持って来たのです。」

東京朝日新聞原稿用紙

「あゝ、さうだッけ。忘れちゃった。貴嬢の項戴」と手を出しちゃった。

私は狼狽て、座布団を後へ返して、

「好いです、私が持ってくから。」

「あら、何故？」

「何故でも……好いです……」

「さう……」

と何ぢか変に思つて振ぶつたが、雪江さんの姿は又暗中を動き出す。暗黒で後くは分らないけれど、風の音さえ見えるやうぢ。私は

跡から探偵で行く。

イヤどう氣が焦る。今だ、今だ、と頭の何處かで喚くと騒ぐする。如何なきやならんやうな氣ぶしてい、づくすくれど、何ぢか如何し出来ず怕くて堪へない。

咽喉が乾いて引付きさうで、思ひずゾビリと

空氣を吞いじミ、と、段々明るくなりて、

雪江さんの姿が際立明るみに浮出す。もう

雪江さんの部屋の前へ来て、雪江さん

の姿は衝と傾るの中へ入りて了つと。

其を見ると、私は茫然しと。怪しいやう

東京朝日新聞原稿用紙

な氣のする一二分で、仔細ぢか、まづ好かつと安心し

と氣味もあつこ。で、續いて中へ入つて、

持つて来こ聖書国をルの前に敷いて、其處

を退くと、雪江さんは褄を言ひながら、入

殆つてれの前ゑ坐つて、

「遊んでらっしゃいな。」

と彩の面を眺上げると。えゝとか、何とか

いつて躊躇してゐる彩の姿を、雪江さんは

ぢロ〳〵視てゐるさが、

「まあ、貴方は此頃一体何大

きくからこゝはねえ。今ごろ彩とは屹度一尺

から違つてよ。」

「まさかこゝ」

「あらこゝは違ふわ。一寸遊うして(ら

のしやいよこゝ」

といひながら、徹と起つてから、何をぬるのかと思つたら、ツカ〳〵と私の前へ来て立と向合つた。前髪が額に觸れさうだ。分とない匂が鼻を衝く。

「ね、ほら、一尺は違うでせう？」と愛度

氣ない白い面が何等なく下から瞳上げる。

私はわな〳〵と震ひ出した。目が見えなくなつた。胸の鼓動は脳へまで響く。息が迫んで、足が竦むで、もう凝として居られない。抱付くか、逃出すか、二つ一つだ。

で、私は後の方針を執つて、物をも言はず
卒然雪江さんの部屋を逃出してすつさと

平凡（四十一）

二葉亭

何故彼時私は雪江さんの部屋を逃出し
このだが、
といふと、
柏

ろしかつしのか分からざ。

何ぞ恒ろしかつしのか分らないが、何がなしに恒ろしかつしのみ。

生死の間に一線を劃して、人は之を越えるのを畏れる。必ずしも死を忘むからでは

ない。死は止むを得ぬと観念しても、此一

線を恒ろしくて越えられん。私の逃出したのが矢張それだ。女をゞらぬ前と知つた後の

の幻界線を傷み皮切りといふ。私は性慾に駆られて此線の手前迄来て、

これさへ越えれば性慾の満足を

得られると思ひながら、此線が怕ろしくて越えられずからさめだ。越えたくなくて越えなかつたのではなくて、越えたくても越えなかつたのだ。其後幾度か往つて再びこれを越えようとしたときにも、矢張怕ろしかつ

しが、其時は酒の力を藉りて、半狂氣になつて、此怕ろしい線を踏越えと。踏越してから、酒の力を藉りて、強いて強に酔くなつて酔はうと、仮令言へぬ厭な心持にさせられようが、其不快を忘れてみと。此線を厭な物をし

まで
て色々性質を満足させたかつたのだ。是は
相手が正當でなかつたから、卿ち貴女であつたからかといわに、
紙ばかりの事かと思つてみたら、さうでな
い。相手が正當の新婦と相知る場合に人は
随分の度を進へ、大抵皆然うのやうに
絶に婦人が無いのやうだ。何故ごらう
？

之と徐のある事で今一つ分らぬ事がある。
人は皆陰れてエデンの果を食つて、人の前
では裏を法ることさへ恥る。
恥のやうに
恥うじて之を
平にして性らぬのは何故力から出来るの
だ。何故ごらう？
人に言はれんやうな事

ざら、名んがないぢやないか？　設てする
ざら、誰の責も怪らず言ふがないぢやない
か？　我てしながら恥ることは所詮でないか
？　所詮どけしど、所為と思ふ者も無いで
はないか？　如何いふ譯ぢ？

之を室内の衝突といふか？　然らば、室内
（男女相知らのを）
一致しとらめ何ならう？　怪ろしいとも恥か
しいとも思をなくなるのか？　高
生と同じ心持になるのか？
トルストイは北方の哲人ごと云ふ。此哲

人はめ何な事を言つてゐる。ロイツェル、

ソナタの所に、理想の実行し得べきは無の理想でない。完全に実行し得らるればこそ理想ぢ。

不犯は基督教の理想である。故に完全に実行のできぬは止むを得

ぬとして、唯之を追ひすべきである、と言つて、世間の夫婦には成るべく兄妹の如く暮らせと勧めてゐる。

何の事ぢ？　些とも分らん。完全を求め得られぬ時、例死すべきでない

不犯が理想でなければ、女房を貰つて、

子を生ませてみて、

夢遊の堕落に鞭を掛けと堕落だ。

加之一旦貰つた女房は去らなと言ふのは

うでないかゝ

女房を持つのが

堕落なら、何故一念発起して赤の他人にな

一生就れらなとは如何ふ理由ぢ？

つゝへといをめ。分らんぢやないか？

今会ふ米が無くて、いもじい時を抱へて考へ込む私達ぢ。そんな伊勢屋の陽炎が心学に凝固つとやうな、そんな暢気な事を言つて生きちやゐられん！

七〇

平凡（四十二）

二葉亭

其後間もなく雪江さんのお婚さんが極つと。お婚さんが極ると、私は何ぢか雪江さんに欺かれたやうな心持がして、口惜しく

東京朝日

て而らずかつさから、国では不承知であつ
とれど、口実を設けて小狐の
家を出て宿してくつさの。
馬鹿な車には、
不宿してから、雪江さんが
と思つて、態々
乗るを見る行つと、雪江さ
萬一驚いではるぬ
小は思ひ知か
車が二三度ある。が、

りつも
んは一向
鄙いで
右
右手
かつさ。及て
お婆さんが極つて炕
るやうごつと
小そしてゐる。それで私
も会ひ忘えしくなつて、もう俄り小狐へも
足踏せぬ中に、伯父さんが去る比二月の郡長
に精じて、家族を引纏めて赴任してくつと

のでゝ私も終に雪江さんの事を忘れてゐた。これでお終ひ。

後り平凡ど、下らない。恋はも少と高尚な精神的のものだと、高尚な人は云ふかも知れん。然うかも知れん。唯彼のやうな平凡な者の恋

はいつも動らど。先づ無意識或は半意識に性慾が動いて満足を求める。後理性や勁味性が動いて其相手を定めて、恋が成立する。わから性慾の動かぬ異性でも秋姫に恋を

こんなのは単純な性慾の発動ではない。

場合は恋はない。異性でも秋姫に恋を

せぬのは其為じ。青年の時分には、性慾が猛烈に動くから、往々理性や趣味性の手を待とんで、自分を盲動して撞着つと者を直ぐ相手にする。私の宮仕さんに於けるが、仰ち彼ど其じ。私共の恋の本能はいつも性

慾じ。性慾は高尚な物ではない、が、下劣な物とも思へん。中性じ、インヂアエレントの物じ。私共の恋の下劣に見えるのは、下劣な人格が反映するので、本能の性慾じ下劣でちえるのではない。

で、

私の性慾は雪江さんに惚せぬ前から動いて

ゐと。から、必ずしも不忍議でも何でもないが、

東京朝日新聞原稿用紙

雪江さんといふ相手を失つた後も、私の恋は依然として胸に成つてゐると。唯相手のない恋、相手を失つて待佗してゐる恋で、

矢張り

其本性は満足を求めて得ぬ性慾だ。雪骨に言つてゐへば、誠の愛の書きと云ぶが、

此猛烈な性慾の満足を求むるのが、其時分の私の生存の目的の一全部とはいはぬが、過半であつた。

これは私ばかりでない、私の友人は大抵然うであつたから、当此次の場所

所謂「遊び」を始めた。私も若し学校に修行がなかつたのと、神経病で思切つて休暇が出来たのとで、遊びだくも遊びが出つたら、矢張「遊」んでかもしれん。唯

学校に修行がなかつたのと、神経病で思切つて休暇が出来たのとで、遊びだくも遊びなかつた。

友人等は盛に遊ぶ、乱暴に無分別に「遊」ぶ。其を叙てゐると、羨ましい。が、弱い性質の癖に、拙て負惜しみばかり、私は一向羨ましさうな顔もしない。つと年長の友人が誘つても私ぶ応ぜぬので、調戯に、私は

[illegible]陸流して居らぶらうといふやうな事を言ふ。つと[illegible]推測通りでつとのでしかしらぬでもなかつたが、私は嘘となる。つと偏屈さられると、激昂して[illegible]癖。

血相と変へて、激論を始

果は
めて、政会までして、遂に其友人とは絶交
してしまつた。
尚うして友人と喧嘩をして見れば、意地
としても云う訳にはゆかない。で、不本意な

ながら謹直家になつて、而して贏ち得た所は
何かといへば、陰鬱だ、渋れのない煩悶
に囚われてゐる。

平凡（四十三）

二葉亭

あゝ、今日は又ふらくすする。此なんな

日に書いたものは書けまいが、毎日

書くことにきめてあるから、一日抜くも残念

じ。向鉢巻でやッつけろ！

で、私は性来の満足を求めて得られなか

つしまで、煩悶してゐし。何となく世の中

が悲観されてならん。友人等は遊ぶ時には

大に遊んで、勉強すら時には大に勉強して、

何の苦しみなく、向白さうに、元気よく日を

送ってゐる。それを見てゐると、私は殊に羨

って堪らない。で、薄志の弱行のと口を極め

て友人の堕落を写って、

（私の煩悶して苦むのは何となく友人の羨むのやうに思はれる。）

（責めてもの腹癒せに）

（而して私）

（未だ発表）

（私）は矢張り超然として、内々で堕落して

東京朝日新聞原稿用紙

ると。若しな人の陸落が陽性なら、私の陸落は陰性ごつた。大人の陸落が露骨で、率直で、露らしい陸落なら、私の陸落はミあ、何と言はう、人間の言葉で言ひやらかない。私は言葉じゃ

東京朝日新聞原稿用紙

こうなり

が、一人で陸落まるのは俗り没趣味で、

どうし夫では趣味性が満たせぬ。どうし夫

後異性の相手が欲しい。が、其相手は一寸

得られぬので、此ひと得ず少なく文学で其不

足を補つてみると、文学から人物も好い。こ

小さな左程に入らぬ。私は文学を女の代りに[illegible]、文学を以て陸地を潤色してみるのだ。

私の語ふ文学は毫末も文学の事だ、殊に小説だ。小説は一体何[illegible]めるか、知ら

ん、唯私の眼に映ずる小説は人間の陸地を潤色するものだ。つまり通人の説に、這般のふらは唯色を漁する、毫末に入ると、唯色を漁するのである。恰れとか、情人で異性と浴むで、唯の漁色に過ぎを添へ

たくなると云ふ。其度ど、其度ど即ち文学の需要を起る可いだ。少くも私は然うであつて。で、此目的で、家初は小狐に居と頃、なんかいと人情本を引き抜き読してみとが、段々数冊になりて、もう人

情本も飽きはく、性慾の発展の描写でも、少し趣味のある描写を味はつてみたい。

そこで、種々と小説本を漁りて、後に当代の大家の作になんで見ると、流石は明治の小説家だ、性慾の発展の描写が巧に人生

彩などで潤色されてあつて、趣味がある、
面白いのは、新しい味で、自分の想像で陶冶する
病は益々高音に入つて、終に面洋へ迄手
を出して、チツケンス、サツカレーゴ、
ツルゲーネフゴ、トル

ストイゴ、といふ人達の手を藉りて、人並
にしてゐれば、中性のインデフェレントの
性慾を、無理に抑圧なるものを病的にして、クラフト
エービングやフオレールの著書中に散見す
るやうな色情狂に陥つて、而し

て行り高尚がつてゐると。

いや、行り高尚がつてゐるのでもない。

それには同氣相求めて友が幾人も出来と。

同郷人で孫備門から文科へ入つと男がある

しが、私は妹と共感化と受けと。あゝ、皆

自分が惡くのので、人を怨むでは済まないが、

私は人でも此男に逢ふと、何とも言へぬ厭な

心持にいるの。使にさるなら刺違へて死ん

でやひたく思ふまでもある。

平凡（四十四）

二葉亭

私が成化と字けたといふのは私より一つ二つ年上でありと。文学が専門ぢから、文学書は私より行き届いてゐたといふわけで、

東京朝日新聞原稿用紙

何でもない事じが、しかも、唯其の事だけを私は大層偉いやうに思つてゐるまじフアウストを讀まぬ時、フアウストの話を聽かされるかなに、友は思ひ附かん事を言つて居るのどが、共男に附かん事を、人生じ、

知慾じ、煩悩じ、内じ、陸蓮じ、解脱じと、いふやうな意味の言葉で物体を附けて話れると、何じか難るくなりて来て、これを法る友は偉いと思つとこんな馬鹿氣じ話はない。友は唯私より早くフアウスト

東京朝日新聞原稿用紙

といふ古本を讀むじよの事ど。讀むで分つと所で、アラストが何程の物だ〜、技巧の如と陰いこう、果も何程の價値があるか。

[illegible]況やなほ[illegible]ふやな讀学の力で分らん處を飛ばし〳〵讀むじのど、讀むで幼稚きまる欲で面白いと感じたじど、を小生閑悟し

東京朝日新聞原稿用紙

て、從頭面白いに極めて掛つて、半分は面白で面白いと感じしじおど。讀むで十分に味はひ得と所で、たゞ人間の作つた物ど、それを此れを讀方として、是右がつて、偶之を讀まゞ者を何程少等の人間かのやうに

見下し、得意になりて法る友も友なら、其を話いて誇昨する私も私じ。心ある人から欲しら、無で苦をしく思をれとらう。

此友から私は文学の道者い譯を種々と説話かされと。今ではもう大抵忘れてゐつし

けれど、仍でも文学は真理に新しい形を賦して其生命を直接に具體的に再現するものじとか小説を話かされて、感服しし。自然の真相は普通人に分らぬ、詩人が其主觀を通して描いて示に成んで、仍て普通

人にも朧気に分つて人間の霊となる事、

とゆふやうな事を話かとかで、又感服しと。

之には人間の眞髓が動く、とか不思議な

事を話かされて、又感服しと。其他まだ種々

話かされて一々感服しとが、此物なる事は当

忘言だ、世迷言だ。宇宙に生命を托して人

生を傳説するばかりで、古本と首引して瞑

想するばかりで、人生に生命を托して人生

と共に浮沈上下せんでも、人生の活機に觸

れんでも、活眼をいて活路を微の間に察

い得んでも、何かして人生が分るものとしても、友のいふやうな芸術的文学は、何処かでの慰かゞ空想しと文学で、文学の実際でない。文学の実際は人間の性格を潤色して、情緒的な人間を実に情緒にするばかりゞ。

私の親方は偏してゐるといふか？、嘘説を知て利を知めといふか？、志かし利よりも説天の勝つしのが文学の実際ではないか？、私の親方より文学の実際が既に偏して居るではないか？、

あゝ、古かし、文学を責めるより、自分を責めるより、

ら責めと二分が少なつてゐる。私の

やうな斗筲な者は、例へば賢の遺書を読

いでも、矢張り実を学ばるかも知れん。私は自然

じ人生じと口には言つてゐるとけれど、唯書

物で学ばな言葉を覚えとゞけで、意味が解

く分つてゐるのではなかつと。意味分ら

ぬ言葉を暗ぜんで、いや、言葉に乗ぜ

て、一可惜浮世を夢にして過つと。詩人と名

がはきや、皆普通の人より勝つてるやうに

思つてゐると。小説、殊に輸入小説には人生の眞相が向ふ浮いてゐるやうに思つてゐると。

西洋の詩人は東洋の詩人に暗ゐやうに思へばいい、作品値ぐるやうに

つてゐると。俗の新意を論じて其價値を

思つて、十人の作と輕蔑してゐる定めて

ゐる。自分は此様な下らん眞似をしてゐる

がら、他の欲に汗して著實の浮世を渡る人

が俗文壇の事情に通ぜぬと、直ぐ俗物と罵

り、俗衆と罵つて、俗り自ら高しとしてゐる

と。好り自ら高しとする一方で、想像で女

達して、一人で陶酔してゐると。

あゝ、恥かしくて顔が熱る。行とる若々しい事であつた。私は當時の事を思出す度に、人通りの多い十字街に土下座して、踏んで、蹴て、唾を吐懸けて貰ひ度やうな心持にさへ。

平凡（百十五）

二葉亭

文学の毒には中らぬ者は恐らく絶対に無いであらう。中れば文学に染めねば止まぬ。私達が卵から孵化して文学に染めねば止まぬ。

子供達が遊ぶ行ら下らぬ物を

書いてがれ

示しこ。すると私も直ぐ美しい気はみ素

詩

短篇を

を出して言いと。ごうせ[illegible]物で[illegible]

私な物ではない。

筋はとられてらつとが、何でも自分を主人公

にして、雪江さんが相手の女主人公[illegible]で、

ごく分の伝ちと學問に

いくとび

幾[illegible]とかく[illegible]

感激するのを、あやふや

な理想や人生観で塗り上げして、高尚めかして

すぐ

りつと物でちつとやうに記憶する。

自惚は天性だから、書上げると、先づ自分

と自分に満足して、當代の老大家[illegible]

[illegible]の作に比して左して遜色はない、なに

示せとら必ず驚く、と思つて、

ら、友はるるかなかつし。

つて行つて呉れる。好い處もあるが、

しう一息じとくふ様なことをいふ。私は

非常に不幸ごろと。が、局量の狭い者に限つて、

の矣を成すを恐れぬ。人を侮れ

猶どといふやうな、愚者な者の常、自分に初会の好い[illegible]考へるから、其孤な蓋の好い事を思つて、友には内々で種々と弄ぶして見しが、何しても書籍に手蔓がない。其中に或人が其は既に文壇で名を成

とて 行事も

に知そにだつて、其人、しゝ誰このを手を使て持て見ぬが好いと教へて

呉れこめで、成程と思つて、早速手紙をかめて

某大家の門を叩いこ。

某大家は其頃評判の小説家であつたから、

立派な邸宅を構へてゐやうとも思はずかつ

しが、瀟洒な家に住つて閑雅な生活をして

ゐらうと思つて、根岸の其宅を尋ねて

見ると、案外見すぼらしい家で、名ある文壇で

大家の住居とは思はれなかつた。ぶれも見窓

らしかつたが、主人の鉄仙の袴

体の臭いと、近く寄つたら悪臭い匂が鼻をし
たうな銘仙の夜具で、銀縁眼鏡で、汚い髭
の底辺に生えと、土気色をした、一寸見れ
ば病人のやうな、陰気な、くすんだ人で、
ねち〳〵としたた雑で
[illegible]
面を考えると

臭いで俯向いて了ふ癖がある。通されたの
は二階の六畳の書斎で、庭を
眺下す
[illegible]
庭には樹から樹へ廻を渡して襦袢
が幕のやうに列べて乾してあつて、か座敷
で赤児の泣く声が聴えて
に

聞えゝ。

私は[illegible]芸く軽蔑の念を起しと。孫に庭の樹保が死木の人格を七分方下げら

やうに思つとが、ホルむる所がつて来との

だから、[illegible]模な風をして、誰れ言ふやうな

東京朝日新聞原稿用紙

世辞を言ざて、[illegible]此人の近作

を読むで非常に感服したやうにいふと、先

生曰を遜と祝詞めて、あれは嗤嗤の作で、

書類と初類に不幸がるつさものだからミ

とかいふやうな申辞めいと事を言つて、言

外に暗く落ちついて書いとら、といふ筆意を含めるる。私は胸の中で下らん奴どと思フしが、感服しと面をして褒びとやうな事を言ふと、先生の萬更厭な心持もせぬと見えて、坊主子は夫から種々文學上の事に就いて話ふ

て、驚く博覧で、而し一家の見識を十分具へてゐて、ムッツリしし人と思ひの外、話が面白い。後進の私達は感服しなければならん筆であるが、それでも私は尚お底の念を云る事が出来なかつた。で、終石に只ふんの香て貰へばいやうに言つて、

雑話一周旋を頼むものは噫に心出さないで、持つて行つて短篇物を置いて、下宿へ帰つて来てから、又下らん奴だと思つた。

平凡（四十六）

二葉亭

某大家は実に角大家だ。私は吾二才だ。

何故私は此人を軽蔑しきのか？　襟垢のついた

いと汚物を著てゐることて、袂に袖襟が乾し

てあつことて、平生名利の外に超然とゐを
示し、高しとする私の眼中に、貧富は無い筈であ
る。が、私は実際先生の貧乏臭いのを看て、軽
蔑の念を起しとのじ。家庭じ。家庭ではあ
るが、家庭が私の一生涯じ。

醫者の不養生といふ。平生思想を性命と
して、思想に役せられてゐる人に限つて、
思想が落莫で云つの時の用に立たない。私
の思想が矢張其じうと。
けれど、思想を大層らしく言ふけれ

ど、私の思想が一体何ごと、大抵は平生親しむ書巻の中から拾つて来ると、謂はゞ古手の思想ごと。此老衰めと生気のない古手の思想が、意識の表面で凝つて結晶として別天地を拾いてゐる点を見ると、――△

東京朝日新聞原稿用紙

私の思想も矢張書巻からとり。

思想ごとも大部分は新しきものもあれども、大抵は人に言つてゐるとほれど、私の思想の中の作物のごと。大抵は平生親しむ書巻から拾ひ出すもの

[illegible]

此老衰

[illegible]生涯の無い思想を遂げて意識の表面に
[illegible]と別天地を拓いてゐるのと、
理想だ、人生観だといふやうな種々の観念
が美しい空想の色彩を帯びて其中に浮游し
てゐて、時が減いこ様が欲しいといふ状態

に比べれば、迫に美しいやうに見える。浮
気な不真面目な私は立ぐ[illegible]間の仕ゆん
好い所を看過けさとふ気にずつて
も境界の中[illegible]に連動し、此別天地に入り込ん
で、其處から現實界を眺めて眺つてゐる
のだ。[illegible]成る在の中心を思想に托して、

[illegible]夫で向ら高しとしてゐるこのだ。が、私の別天地は傍方へば遠幻無へ吹聴けこ烏滸の[illegible]やうな物[illegible]だ。現實界に觸れて[illegible]實感を得ると、他愛ないく刈げてゐ小、刈げて本地が露はれる。[illegible]

ふて古手の思想は木地を飾つても、木地を蝕する力に[illegible]。木地に食入つて表を禁くの[illegible]実感の力に待ねばならぬのに、私は[illegible]の思想に逢ぜ、現実を軽蔑してゐるから、実感を得る場合が少く、偶得る実感も、其形骸を誤

つてゐるから、木地の色を磨くにならな
かつた。從て何程惡を積んで見ても、木
地の本性を失ふ事は、色はふやけと、
模様のない、陋劣な色であつた。

唯當時は為かつたから、陋劣で

かうして本来の惡は別天地と木地の色
とは別々であつたから、別天地に遊んでゐ
る時と、色に戻つた時とは、勢ひ矛盾する。
言行は始終一致しない。某大家に對しても、
未だ今はぬ中は多少の敬意を表つて

みこしかど、一らび共人の土気色しさ欲が見え、禁垢が見え、裸体が見えて、想像中の人が現実の人となると、木地の赤が、貧乏どころから下らんと、別天地では流行ヒめ論法で論じして、之を軽蔑しのだ。

唯当時私はまだ若かつしから、[illegible]

でも何でも、私の赤には流行が考つて、文壇の大家になると、古手の忘恩が難固つて、共人の赤を之に壓倒せられ、遂に殘骸を保つてゐるやうなのがある。教ふも判らいふ人が現実に飽れると、気の毒な程他愛の無い人

東京朝日新聞原稿用紙

にいる。　某大家が何ち其であつし。じから、
人生を論じ、自然を説き、微を析き、理を
学く頭はあつても、同様で私が軽蔑して
ゐるのが、見えなかつたのだ。

先生には絶に

「日間道録」(八)　大正14年10月　執筆

付19(1919)(376)

東京朝日新聞原稿用紙

ぬ人の[illegible]事ばかり、お俗の居場を一枚剝がすと、下から出て来た[illegible]なる姿形の書きさし物が出て来たばかりに、[illegible]に不思議はないが、此方も此方ど、共お[illegible]事は少しも見えない。本當に是でぬい事じと思つて居る所が、其言葉を信じて居る所が

の雑誌へ同盟を称し、こんなのを「同盟の分れ蛮り」と謂ふのさうだ。

[redacted]と刹せられて、先輩も仕方がなさうに[redacted]

[redacted]を学ぶか。[redacted]の想ふは例で、流行[illegible]た人には[illegible]

[redacted]

一月程して彩の遠女作は武雑誌へ出た。

東京朝日新聞原稿用紙

彩霞が霞げて物にならぬかつた事を書いたのだからそれは彩霞じ。雪江さんの紀念に、雪江と署名した。先生が筆を加へて私の文は行方知れにならぬ所も大分あつたが、先も角も自分の作が活字にナつたのが

嬉しくて〳〵耐らない。雑誌ばかり送って
来るのを待ちかねて、近所の雑話が一段
付けて、買って来て、繰返し〳〵読むでも
読絶かなかつた。真面目な人なら、此
頃で自分の愚劣を悟るべきが、私は反て自

惚れて、此分でば行々は日本の文壇を震撼
させる事も出来やうかと思つた。
卿ろながら猶も莫へとから、二三の友
を誘ひて、近所の牛肉屋で祝宴を開いて、
其晩遂に遊びに行つた。其時柴外不愉快

であらうのは覚て話しと通り。皆様しさの後
りに前後と忘却しこので。
これが私の小説を書く病はさび又「遊び」
の皮切であつたが、それも是も後の無い
事ではない。私の身では思想の皮も枚剝れ

ば、不思議は文心即渾心じ。だから、不思議はない
が、同時に両方に等中にさうてる中に、学
校を除籍されと。なに、月謝の滞が原因で
つたから、復籍すに迷惑はなかつたが、
私は考へし、その事小説家にさつてくた

東京朝日新聞原稿用紙

う。法律を学んで学び通り政治家になれたって、仕方がない。政治家になって可惜一生を物質的文明に献げてうふう、小説家になって精神的文明に貢献する方が高尚だ。其方が好いミ。どうも仕方がない。

東京朝日新聞原稿用紙

近眼を開いて人生の活相を観得なかつた私が、例の古手の家式の思想に捕はれて、斯う思つたのは仕方がないが、夫にしても、同じ思想に捕はれるにしても、少し捕へられ方がありさうなものだと。物心一如

と其孤立の仰度矣い思想に拘はれるではないが、所謂物質的文明は今世紀の人を支配する精神の活動と、何故思はれなかつたらう？物質界と表裏して活る人や政学者が欲みる精神界が別にあると、何故思はれなかつたら

うと、人間の意識の表面に浮んだ別天地の精神界と違つて、此精神界は着実で、多力で、吾々の生活に大関係がつて、政治家は仰ち此精神界を相手に仕事をするものだと、何故思はれなかつたらう？

此道理

をも考へて、其上で去就を決しるのなら、
眞面目な決心とも謂へやうがゝあり、表か
し、何の道思想に捕はれては仕方がない。
私は思想で、自ら欺いて、其極な浅墓な事
を思つてゐるとゞ、思想に上らぬ実際の私は

左の通り

全く別の事を無歌に歌つてゐし。

「権利の義務のと最者ぶ強ようも、色の
換ぎて世渡りさんせ どうせ短かい命世
え引」

東京朝日新聞原稿用紙

全く別の事を思つてゐると。何んな事を思つてゐとかは、私の言ふ事では分らない、是から追々為る事で分る。